

空洞と水分 — 佐野陽一の写真が示す景色の速度

陸地に穿たれた空洞に水が満ちると池や湖となり、細長い空洞に水が流れれば川となる。池や湖や川は、佐野の写真における撮影地／撮影対象として重要な役割を果たしている（空洞については2015年の佐野の個展への寄稿文を参照／TAGA2のサイトにて閲覧可能）。また、「空洞に満ちる水」は、「空に浮かぶ水＝雲」を、「空から降る水＝雨、雹、雪」を、「空気に漂う水＝霧、靄、霞」を、想起させる。それらの「空気中の水分」は湿度に関わり、佐野の写真に表出する光の質に影響する（温室をモチーフとする作品はその好例である）。

雪景色の中の湖をとらえた写真、例えば、近景に樹木が、遠景に湖の向こう岸が見える作品では、水面による光の反射と雪面による下方からの光が、幻惑的な景色を出現させている。水面を滑るように湖の向こう岸まで到達する視線は、空へと上昇し、ブーメランのように、向こう側からこちら側へと戻ってくる。まるで近景の樹木を向こう側から見ているようでもあり、天地が反転するような感覚を覚える。

鉄棒で逆上がりをする人を後方から見ているように、景色全体が、下方から向こう側へと回り込み、上方がこちら側へと倒れてくるように、回転を始めている。その時、湖の向こう岸からこちらを見ている視線が、写真の前に立つ私自身の姿をとらえているように感じられてならない。同時に、写真の前に立っている私は、湖の向こう岸からこちらを見ている視線を、確かに感じている。

ここに、「誰が写真を見ているのか」という写真原理の根幹に潜む問題が浮上している。写真の前に立っている私は、こちら側の湖岸＝此岸から、向こう側の湖岸＝彼岸を、見ている。同時に、此岸に立つ私に向けて、彼岸から発せられる視線が、確かに感覚される。逆上がりに喩えた景色の回転は、此岸と彼岸の往還を、私と私ならざる存在の往還を、意味しているのだろうか。景色を回転させる速度、すなわち、「景色の速度」を体感しながら、「向こう側から見ているのは誰か」という問いが、知覚と認識のはざまを駆け巡る。

「(前略) 私はピンホールの手法で作品を制作しています。写真には光が必要ですが、そもそも、人がものを見て世界を知覚するためにも、それは不可欠な条件です。光は刻一刻と表情を変え、ものや風景の姿を変貌させます。

私はきっとこれからも、その様を写真というメディアで捉えることを続けて行くでしょう。

流れの中へ挿し入れた掌で水を掬う時のように注意深く、何度も何度も繰り返しては、零れないようにして。」(佐野陽一) ※

この記述において、「水」を湛えるのは、掌が作る小さな「空洞」である。それは、不安定な形状で、隙間があり、水が零れることは避けられない。水を掬うには、佐野の記述のとおり、「注意深く、何度も何度も」繰り返すしかない。佐野が光をとらえる撮影は、そのような行為であるに違いないが、水を掬うには、掌を水に挿し込む速度と、掌を水からひきあげる速度が、とても大切だ。

雪景色をとらえた写真に出現する光のフレアは、被写体の側には存在せず、撮影によって初めて可視化される。このような光と色彩の世界を写真原理によって開示するには、まさしく、速度が重要である。風速から音速を経て光速へと至る可変的な速度のうちに「景色の速度」が存在することを、佐野の写真は教えてくれる。佐野は、「景色の速度」を自在に操ることによって、私たちの眼前に、写真原理によってしか開示することができない光と色彩の世界を出現させている。

※佐野陽一「表紙絵のことば」『青淵』871号(2021年10月号/発行:公益財団法人 渋沢栄一記念財団)。